

二度目の人生をあなたとーサンプルー

1. 康人

クリスマスソングの流れる店内。小さな男の子がシャンシャンという音に合わせ、ショーケースを覗き込みながら手を叩いている。

「予約していた谷村です」

道隆が引き換えレシートを店員に渡す。

「ありがとうございます」店員がケースからホルケーキを出し、康人たちの方に傾けた。「こちらでお間違いないでしょうか」

いちごがたつぷりのった贅沢なやつ。早く食べたいけれど、これは夕食の後まで我慢だ。

道隆が袋を受け取り、外に出る。冷たい空気が康人の頬を刺した。けれど、心はぼかぼかと温かい。

(手、繋ぎたいな)

早く帰りたい。そうしたらいっぱいいくつとこができる。キスをして抱き合って、それで――。

付き合い始めて今日で五年。でも倦怠期なんて一度もなかった。康人の胸にはいつでも「好き」があふれている。

「本当にケーキ好きだね」

「え？」

「顔、にやにやしてる」康人の顔を覗き込んだ道隆が可笑しそうに笑う。

「違うよ！ 帰ってからのこと考えてたの」

「ふうん……エッチ」

「っ！」耳元でささやかれ顔が熱くなる。「ちよつとっ！」

他人の目を意識するフリをして左右に顔を振り、熱を冷ます。

「みんなクリスマスのことしか考えてないよ。見てない見てない」

「……道隆くんもクリスマスのこと？」

「え？ 俺は——」

その先が気になる。横断歩道の手前、赤信号で足を止める。

「何？」

「それはもちろん——」

自分のことだろうかと胸の高鳴りを感じながら、右に立つ道隆を見上げた時だった。

突然後方から聞こえた不快な高音。胸にどんという衝撃を受けたと思ったら、尻もちをついていた。目の前にいたはずの道隆がいない。かわりにあったのは白い軽自動車。

「キヤー！」

「おい！ 大丈夫か！」

「警察！」

「先に救急車呼べ！」

飛び交う悲鳴と怒号。

「道隆くん……？」

何が起きたのか、わからなかった。

2・貴之

「貴之、菓飲んだ？」

「飲んだよ」

「今日私、遅くなるから」

わかったと言いながら革靴を履くと、姉の美由紀がアツと慌てた様子でパタパタと部屋に戻った。

「姉ちゃん？」

「今日寒いからこれ使いなさい」

首に巻かれたマフラー。ふかふかして暖かいが、キヤラメル色は三十五の男には少々ガーリーだ。

しかも、甘い香水の香りがする。

「大丈夫だよ。まだ十月なのに」

「ダメ。今夜からぐっと冷えるって。あんたのは今日、私が仕事行く時にクリーニングに出しておいてあげるから」

美由紀の過保護さにうんざりしていたのは二十歳の頃までだった。今では本当にただただありがたい。

それに、たくさん心配をかけた。

「ありがとう」

「転ばないように。それから万が一遅刻しそうになっても——」

「走らないよ、大丈夫」

行ってきましたと告げて外に出る。共働きで忙しい両親に代わり、体の弱かった貴之の面倒を見てくれたのは五つ年上の美由紀だった。来年には四十だというのに結婚もせずに家にいるのは、きつと貴之のことを気にしてだろう。

（もう大丈夫なんだけだな）

貴之は子どもの頃から心臓を患っていた。数回の手術と長期の入院。両親が忙しいのは貴之の医療費を稼ぐためで、そのために姉は親代わりをして——いよいよ移植しないとまずいとなったのが五年前のこと。補助人工心臓を手術で取り付け、移植希望者として登録した。しかしドナーはなかなか現れず、そのせいで両親も姉もそれまで以上に過保護になり、時折目を腫らして病室に訪ねてくるようになった。

（ありがとうございます）

胸に手を当て空を見上げる。生きるために一番必要なこの心臓をくれた人はどこの誰か、いったいどんな人だったのか、貴之には何もわからない。教えてもらえたのは当時三十二歳の男性だということだけだ。どんなことが好きでどんな生活を送っていたのだろう。結婚はしていたのだろうか。

「よろしくお願います」

靴から封筒を取り出し、感謝の気持ちを込めてから郵便局の窓口に差し出す。この手紙を送ることとドナーの家族の心がどうなるのかはわからない。心臓が元気に動いていることを良かったと思ってくれるかもしれないし、大切な人の心臓を使って生き延びた人間の自己満足だとイラつかせるかもしれない。

ただ、移植コーディネーターから送らないようにと言われてはいないので、少なくとも絶望するほどの負担を与えてはいないはずだと思いながら、毎月、ドナーの家族にサンクスレターを送っていた。

電車に乗り、会社の最寄駅で降りる。ビルに入ると、エレベーターホールに女性の背中が見えた。

「おはようございます」

声を掛けると、ぱっちりとした目の女性が笑顔で振り返った。

「あ、おはようございます。少しずつ冬っぽくなってきましたね」

名前は知らない。しかし三階のネイルサロンに勤める彼女とは毎日顔を合わせ、挨拶を交わしている。濃くはないがしっかりと塗られたファンデーション。まつげは長く、くるんと上を向いている。美人だな、とは思っていた。

「先々週くらいまではまだ真夏みたいな感じだったのに、寒暖差が堪えますね」

当たり障りのない会話。しかし今日は彼女の視線がやけに貴之の首元に注がれていることに気が付いた。

「何か？」

チンという音を立てて到着したエレベーターに乗り込む。

「あ、いえ」

名も知らぬ彼女が焦った様子で視線をそらした。「あ……すみません。香水臭かったですか？ 姉が寒いからして行けと言っ」

「あ、お姉さんのですか」

「はい。スーツにこれでは目立ちますかね」

明日の夜にはクリーニングが仕上がっているだろうか。帰りに寄れば、明後日には自分のものを使うことができる。

「いえ、よく似合ってます」

扉が開いた。彼女が寒さからかほんのりピンク色をした頬を上げて「それでは」と言っエレベーターを降りた。貴之も頭を下げて挨拶し、意識を仕事に切り替えた。

3・康人

このままではいけないとわかっている。道隆が好きだと言ってくれたのは康人の笑顔で、泣くといつも困った顔を浮かべていたということも。け

れどどれほど泣いても、まるで壊れた蛇口のようにふとした時に勝手に涙があふれ出す。

「道隆くん……」

会いたい。好き。大好き。遺骨の入った箱を抱え、何度も「好き」を繰り返す日々。

本当は死んでしまいたかった。そうすれば彼に会える。でもあの時道隆は康人を突き飛ばしたのだ。守ってくれた命を自分で終わらせることはできなかつた。

「うう……会いたいよお……」

抱きしめてほしい。寂しい思いをさせてごめんねと言つてキスをしてほしい。

額に指先をあててみる。その次は左の頬、右の頬。そして鼻先……最後に唇。いつも寝る前に道隆がキスをしてくれた順番。五年間、泊まりの出張の時以外は毎日それをしてくれた。夜に家を空ける時はその前日からぬいぐるみを抱きしめて「匂いを移しておいたよ」と、「寂しい思いをさせるけどこの子を抱いて寝てね」と……。

「道隆くん……」

なんで置いていったの。どうしてあの時突き飛ばしたの。抱きしめてくれたら一緒に逝けたかもしれないのに。

頭が痛い。涙で水分を失いすぎて喉がカラカラに渴いている。

重い足を引きずり、キッチンの水道から直接水

を飲む。もう二年だ。あと二か月足らずで道隆を失ってから二年が経つ。それでも心は少しも癒えることがない。

財布だけを持ってふらふらと外へ出る。向かう先は道隆と出会ったゲイバー。カランという音を聞きながら店内に足を踏み入れる。

「——ああ、いらつしやい」

事情をすべて知るマスターは、いつ康人が来てもいいようにカウンター席を二つ空けておいてくれていた。いつも道隆と来た時に並んで座っていた場所だ。

「お酒はだめだよ」

何も言っていないのに目の前に置かれたウーロン茶。自分はそんなにひどい顔をしているのだろうか。

「……うん」

ここに来ると道隆とのかを思い出してつらくなるのに、それでもどうしても足を運んでしまう。

一度、この町を出ようと思ったことがある。どこかへ行ってしまいたくて、行く宛てもなく乗り込んだ電車。しかしもうすぐ街を出るとなった二駅先で吐き気を催し、それ以上進むことができなかつた。やっぱり自分は道隆と過ごしたこの街にいたいのだ。外を歩く度に道隆を探してしまうけれど、それでも——。

康人の左で空気が動いた。道隆がいつも座って

いた席。ハツとしてそちらを見る。けれどそこにいたのは知らない男だった。

「待ち合わせ？」

道隆がいるわけがないとわかっていながら、それでも道隆ではなかったことにショックを受ける。

「待ち合わせ？」

男がもう一度問うた。首を振るだけで返し、ウーロン茶に視線を戻す。

「彼氏いるの？」

「え？」

「指輪」

男の視線は康人の左手薬指に注がれていた。

あの日——道隆が事故にあった日、道隆のズボンのポケットに入っていたと言って医者から渡されたものだ。小さなケースには二つのリングが入っていて、内側にはイニシヤルと付き合い始めた日付が——。

「ねえ、聞いてる？」

「え……あ、はい。彼氏、います」

「今から来るの？」

「……来ないです」

心の底から来てほしいと思っっているけれど。

「じゃあ一緒に飲もうよ」

「いえ、彼のが大好きなので……すみません」

「別に飲むぐらいいいじゃん」

「いや、あの……」

「しつこいよ」

突然割り込んできた聞き慣れぬ声。声のした方を見ると、男の左側に座っている男性客だった。

「やめなよ」

男が言葉を重ねると、最初に声を掛けてきた男は舌打ちをして店を出て行った。

「大丈夫？」

「あ……」

同じだった。道隆と出会った時も同じように道隆が助けてくれたのだ。その時康人に恋人はいなかったけれど、酔っ払いに絡まれている、偶然居合わせた道隆が「しつこいよ」「やめなよ」「大丈夫？」と——偶然だとわかっている、まったく同じ三つの言葉に胸が苦しくなる。

「ごめん、迷惑だったかな」

思い出にない言葉を掛けられ我に返った。

「いえ！ すみません、助かりました」

男はホッとしたように目を細めた。どこか雰囲気気が道隆に似ている。でも道隆はキャラメル色のマフラーをするタイプではなかった。マフラー自体はおしゃれだけれど、どこか少し浮いている。女性のものだろうか。わずかに甘い香水の香りが漂ってくる。

「彼氏、呼んだら？」

「え？」

「危ないし、迎えに来てもらった方がいいよ」

「あ……いえ……亡くなったんです」

「え……」

「二年前に。この店で知り合った人で……つい来
ちやうんです」

「……今日が命日とか？」

「いえ、違うんですけど……」

「あんまり顔色良くないね。大丈夫？」

「あまり眠れていなくて……今日はもう帰ります」

店内を見回すと、ボックス席で常連さんと話し
ているマスターの姿が見えた。康人も挨拶くらい
はしたたことのある人なので、会計で呼び寄せても
問題はないだろう。

「送ってどうか」

「すぐ近くですから」

出会ったお店の近くに住みたい。同棲すること
が決まった時にそう言ったのは道隆だった。康人
もなんて素敵な案だろうと――。

「そう……眠れない時はぬいぐるみを抱っこする
といいよ」

「え――」

思わず目を見開くと、男が照れたように頭を掻
いた。

「ごめん。いい大人の男がぬいぐるみなんて持つ
てないよね」

「あ……いえ、彼がプレゼントしてくれた子がい
るので」

まんまるの目がかわいい、少しもぐらに似たカモノハシのかーくん。

「そう」

優しいほほ笑み。やはりどこか道隆に似ている。穏やかな話し方と目つきだろうか。外見はまったく違うけれど。

「じゃあ、今日はもうその子とゆっくり休んで」

「ありがとうございます」

会計をして店を出ると、途端に心臓が激しく動き始めた。

驚いた。最初の声掛けだけでもひどく驚いたのに、眠れない時にぬいぐるみを抱っこなんて——いや、きっと幼く見えたのだろう。

道隆も初めて康人と出会った時に、高校生かと思ったと言っていた。だからナンパされているのを見て心配になったのだと。それからもう七年も経つのだから、さすがに高校生には見えないだろうが、歳より若く見られることはよくあった。

（生きてたらもうすぐ三十四歳か……）

亡くなった時、道隆は三十二歳だった。あつという間に四歳の年の差をなくしてしまう。道隆よりも年上になってしまう。

（会いたい……）

家に入ると、なぜか室内が普段と違って見えた。道隆と似た人に出会ったからだろうか。二年間まったく気にならなかったのに、部屋の中がひど

く荒れていることに気付く。

窓を開けて冷たい風を入れ、床に散らばった洗濯物を片っ端から洗濯機に突っ込んでいく。

（道隆くんとの部屋、汚しちやつてごめんなさい……）

片付いたところで白い布の貼られた骨箱を抱いて寝室に入る。ヘッドボードに置き、かわりにかーくんを抱く。

（かーくん……）

改めて顔を見るとひどく汚れていた。抱きながらずっと泣いていたからだろう。

「汚してごめんね。明日一緒に風呂に入ろうね」
ごわごわの頭を撫でると、かーくんの表情が少しだけ和らいだように見えた。

くく略くく

5・康人

「今日は何飲む？」

「あれ、ウーロン茶じゃー」

「少し顔色が良さそうだから」

自分の体調を気にしてくれる人がまだいたのかー。今までもそうしてソフトドリンクを出してもらっていたというのに、改めてそんなことを意

識した。

「あ……じゃあ、エッグノックを」

「はいよ」

クリスマスイヴ。でもこの店の様子は普段とほとんど変わらない。特別客が増えるわけでも、減るわけでもない。小さなツリーがカウンターテーブルの端にそっと置かれているだけだ。

「お待たせ」

「ありがとうございます」

康人は、温かいそれをゆっくりと飲んだ。優しい甘みが体に染み込んでいく。

それは、道隆が寒い夜に作ってくれたものとは少しだけ味が違う。マスターは牛乳で作るけれど、道隆はいつも豆乳で作っていたのだ。

（おいしい……）

牛乳で作っても豆乳で作っても、どちらもおいしい。そんなふうと思うのは初めてだった。これまでずっと道隆が作る豆乳のエッグノックが一番おいしいと頑なに思っていたのに。

（少しずつつ心が慣れてきたのかな……）

でも道隆がいらない人生に慣れたくない。このままだといつか道隆がいなくても平気になっってしまうような気がする。それが怖い。

「こんばんは」

左を見ると、一席空けたその隣に男が腰を下ろした。前にナンパから守ってくれた、道隆に似た

雰囲気の人だった。

「あ！ こんばんは。その節はありがとうございます
ました」

どうやら男も覚えていたようで、にこりと笑顔
を見せてくれる。

「いえ、無事に帰れましたか？」

「はい」

「あ——すみません、名乗ってなくて。貴之です」

「康人です」

（たか、が道隆くんと一緒……）

「あの、漢字って、」

「貴族の貴に、ひらがなのえ（、）みたいな」

「貴之さん……」

（隆じゃない……）

別人だ。わかっているけど、どこかに道隆を感じ
たくなってしまう。

「康人くん、その後どう？ 寝れてる？」

「あ、はい。かーくんと」

「かーくん？」

マスターが話に割り込んできた。ホカホカと湯
気の立つおしぼりを貴之に手渡す。

「ぬいぐるみです」

「カラスの？」マスターが首を傾げる。

思わず笑ってしまった。笑うことができてし
まった。だって道隆も、康人がかーくんと名付け
た時に「それじゃカラスじゃん」と笑ったのだ。

「カモノハシだよね」

貴之に頷く。「はい」

「カモノハシのぬいぐるみなんて売ってるの？」
マスターが可笑しそうに笑う。

「あんまり売ってないかもしれないけど、かわいいですよ」

そういえば、この辺りでカモノハシのぬいぐるみ売っているのを見たことはないな、と気付く。康人たちが行った動物園のオリジナルなのだろうか。

(ちよつととぼけた顔がかわいいんだよな)

ライオンやトラ、ゴリラにパンダ。お土産屋さんにはたくさんのぬいぐるみがあったのに、どうしてもかーくんが欲しくなったのだ。

(かーくんも道隆くんに会いたいだろうな……)

ふと、胸がざわめくのを感じた。胸を押さえる。
なんだろう。

「康人くん？ どうしたの」

心配そうな顔の二人が康人を見つめていた。

「あ、え？ いえ、なんでもないです」

「そ？ はい、ペリエ」

「え……」

マスターが貴之の前に置いた透明のグラス。思わずそれに視線を奪われた。

「どうかした？」 視線に気付いたマスターが首を傾げる。

「あ、いえ……」

ただの偶然だ。初めて会った時に貴之が道隆と同じ言葉を使っていたのも、道隆と同じようにペリエを注文するのも。

道隆は家では酒を飲んだけれど、外では決して飲まなかった。酔った康人を抱けなくなるから、なんて笑っていたけれど、安心して飲めるようにしてくれていたのだと思う。

「康人くん。彼氏の話、聞かせて」

気付けばマスターはカウンターから消えていた。お客さんとテーブル席で飲むのが好きなのだ。ここに来るのは常連ばかりで、そんなことはみんな知っているのも違和感はない。でもなぜか貴之といると胸がざわついて落ち着かない。

「……え？」

「彼氏の話。嫌だったらいいんだけど、たまにはのろけてみたら」

「のろけ……」

「そう。単なる思い出話でじゅうぶんだけど」

康人は友達にも両親にも同性愛者であることを告げていなかったもので、道隆とのことを人に話したことはほとんどなかった。マスターだけは関係を知っていたけれど、ここに来るのはいつも二人揃ってだったので、道隆のことを話すという機会はほとんどなかった。

「道隆くんは……」

「うん」

「かっこよくて優しくて……」

泣いてしまうかもしれないと思ったのに、不思議と涙は出なかった。なんだかすぐ近くでほほ笑みながら見守ってくれているような気がする。

「一緒に住んでたんですけど、たまには待ち合わせデートしようかって言ってバラバラに家を出て……駅前とか公園とかで待ち合わせしてたんですけど」

「うん」

「一緒にいたらすぐ二人きりになりたくなっちゃって。結局そのまま家に帰ってきちゃったりして」

「それでイチャイチャするの？」

「そういうこともありましたけど、帰りにレンタルショップで映画を借りたりゲームを買ったり……でもどれほど一緒にいても慣れなかったっていうか」

「慣れない？ 緊張してたの？」

貴之は穏やかに笑いながらペリエを舐めた。

「そうじゃなくて……なんて言うのかな、ずっとドキドキしてました。寝るのも一緒だからそこそ本当にずっと一緒にいたのに、朝起きておはようって言って、それだけであー好きだなって。一緒にいられて良かったって」

「そうなんだ」

話し始めたなら、自分でも驚くほどスラスラと言葉が出た。もしかしたら、ずっと誰かに道隆との思い出を聞いてほしかったのかもしれない。

「かーくんを買った時の話は？」

「動物園に行っただんです。隣町のじゃなくて、少し遠いところ。その時はライオンの赤ちゃんが生まれたってニュースになって、見に行こうって。でも結局健康診断か何かでその日は赤ちゃんを見られなくて寂しがってたら、お土産屋さんに入っ
てかーくんを買ってくれたんです」

「ずっと一緒に寝てるの？」

「はい。でもあの日……貴之さんと初めて会った日に家に帰ってからかーくんを見たらなんかポロポロで……彼が亡くなってから二年間、ずっと抱っこしながら泣いてたのに、一度も洗ってあげられてなくて」

「……うん、そっか」

貴之は静かに相槌を打った。仕事でつらいことがあった時に道隆が吐き出させてくれた時みたい。「だから一緒にお風呂に入りました。手で優しく洗ってあげて、タオルで拭いて」

「じゃあその日は一緒に寝れなかった？」

「まさか！ お風呂はもちろん朝一で。日の当たるところで一緒にお昼寝をしました」

その時は驚くほど穏やかな気持ちで眠ることができた。

「かーくんも嬉しかったと思うよ」

「へへ」

「そういえばカモノハシって哺乳類なのに卵を産むんだよね」

「あ、よくご存じですね」

康人はかーくんを買ってもらった帰りに検索して知ったのだ。

(…：…あれ？)

また胸がざわついた。いったいどうして——。

「ん？ どうかした？」

そういえば、前回会った時、康人はかーくんがカモノハシだと言っただろうか。そもそも初対面の相手に「かーくん」なんて言い方をしたのだろうか。さっきはつい言ってしまったけれど。

「あの、僕、かーくんがカモノハシって言い間違っただけ」

「えっ…：…」

貴之の目が泳いだ。右手の中指で耳の裏をかき——道隆が困った時にしたのと同じ仕草。

「いや…：…あー…：…」

耳の裏から下りた手が左の首筋に触れた。これは、道隆がごまかしたいのに嘘がつけなくて焦っている時の仕草。

「…：…道隆くん…：…？」

ありえないと頭ではわかっている。道隆は二年前の今日、事故で亡くなったのだ。遺体に対面も

したし、児童養護施設育ちの道隆くんを茶毘に付したのも康人だ。墓も用意はしたけれど、離れられなくてずっと家にお骨も置いたまま。毎日その重みを感じているので、夢だったなんてことはありえない。

けれど康人は道隆の話は誰にもしていないし、当然カモノハシのぬいぐるみを持っていることも言っていない。道隆が誰かに話していたのだろうか——しかし、記憶とかぶるセリフ。困った時のくせ。

「道隆くんなの……？」

違う、きつと偶然だ。ナンパから守る時の言葉なんてみんな同じようなものだろう。それにカモノハシだつて、きつと自分が言ったに違いない。初対面の人にぬいぐるみを「かーくん」なんて言うのが憚られて、きつとそれで——。

「康人くん……」

貴之がまた耳の裏を中指で搔いた。

(中指で……そんな人、たくさんいる……?)

怪我でもしていない限り、普通は人差し指を使うだろう。

いや、自分はきつと道隆だと思いたいだけだ。

姿形は違っていても、道隆がこの世にいると——。でも、どうして貴之は「違う」と言わないのだろうか。

(それは——)

道隆だから、だ。道隆は嘘を嫌っていた。

「道隆くん？ 道隆くんなの？」

何も言わない貴之に焦れ、思わず腰を上げた。

反動で倒れた椅子がガタンと大きな音を立てる。

「やっちゃん、どうしたの？」

背後からマスターの慌てた声が聞こえた。でも今は貴之の言葉を聞きたかった。腕を掴み、「ねえ！」と揺さぶる。

「道隆くんなの？」

「すみません、マスター。おかんじよ……お会計を」

お勘定。その言い方も道隆と同じだった。

「ちよつと、どうしちゃったの？ 喧嘩？」

「違いますよ。二人分、これで」

貴之がお札を一枚テーブルに置いた。相手向きを合わせて差し出すところもすべてが道隆だった。

「ねえってば！」

「ほら、おいで」

少し強引に肩を抱かれた。でもその手はすぐに背中を優しく押すだけになる。

外に出ると、冷たい風に当たって理性を取り戻した。右斜め前を歩く貴之にとぼとぼとついていく。

（ありえないよね……）

だって道隆は亡くなったのだ。遺体とも遺骨と

もずっと一緒にいたし、いる。息を吹き返して傷を整形して……なんてことがありえないことは康人が一番よくわかっている。

「あの」

小さな声だったのに、貴之は足を止めて振り返った。

「ん？」優しい言い方。

「ごめんなさい」

「全然」

「あの、僕——」

帰りますと言おうとした時、貴之が公園に入った。迷いのない足取りでいくつもあるベンチのうちの一つに腰を下ろす。

(ここ……)

道隆と初めて顔を合わせた夜も、バーを出てこのベンチに座り朝まで話をした。

「康人、おいで」

言い方が、記憶にある道隆とまったく同じだった。

「道隆くん……！」

やっぱり道隆だった。

「ごめんね」

「どうということなの？ 道隆くんなの？」

早く「そうだよ」と言っただけだった。さすがに両腕を握ると、肩に手を添えられベンチに座らされる。

「寂しい思いをさせてごめんね」

くく略くく

6・貴之

「あんたやっぱり本当は彼女できたんでしょ」

「……え？」

「昨日の夜、家抜け出したでしょ。でも連絡ぐら
いは入れなさいよ。お父さんとお母さんにはうま
く言っというてあげるから」

「出さないよ？」

「はあ？」

「メールの後、あのまま寝たよ？」

昨日は帰宅後、リビングのソファに買ってきた
バッグを置いて写真を撮り、姉に送って眠りにつ
いた。

「え、じゃあ見間違えたのかな……駅の近くであ
んたのこと見たって友達が言ってたんだけど」

「見間違いでしょ」

どこにでもいるような平凡な顔だ。体型だつて
一般的。

「いや……もしかしたらあんたのドツペルゲン
ガーかもよ」

バッグをゲットして姉は機嫌がとてもいいらし

い。夜勤明けだというのにシャンパンを半分も飲んでしまっている。

「ドッペルゲンガーって……」

口を閉ざす。いい年して何を——なんて失言をすれば一か月分の給料を使わされる。

「まあせつかくいたただいた命なんだから楽しみなさい」

「うん。じゃあ行ってくる。飲み過ぎないでね」

「道路凍つてるところもあるかもしれないから気を付けて行きなさいよ。転ばないように」

「わかってる」

外はひどく寒かった。くしゃみを三発。その衝撃で突然出てきた鼻水をずずっとすり、空を見上げる。雲がかかっついていて薄暗い。でもこうして天気の変化を意識する余裕ができたのも、誰かがドナー登録をし、その家族が同意をしてくれたから。

（ありがとうございます）

郵便局に寄り、手紙を窓口差し出す。きつと毎月移植ネットワークに手紙を送る人は珍しいのだろう。年老いた郵便局員は「いつものだね」と優しく言ってそれを奥のボックスに入れた。

「よろしく願います」

無事に届いてほしい。

心臓は今日もドクンドクンと動いている。

「あーおはようございます」

エレベーター前。美咲は少し疲れた顔で立っていた。

「おはようございます。少しお疲れですね。大丈夫ですか」

「ああ…：はい、昨日はすごく忙しくて。でも今日は昨日ほどではないので」

「ああ、日本人は当日より前日に盛り上がりますもんね」

顔を上げ、エレベーターの位置を確認する。どうやら最上階で止まっているようだ。年末なので荷物の出し入れでもしているのかもしれない。

「あの」

呼ばれ、視線を下ろす。「はい」

「これ…：よかったです」

「あ…：ありがとうございます」

差し出された小さな袋。受け取って覗き込むと、小さな箱が入っている。軽いのでクツキーだろうか。

「あ、すみません、何も用意してなくて」

「いえ！ 私が勝手に」

いい子だよな、と思う。顔もかわいらしいし、性格も押しが強い。仕事も頑張っているように見えるし—なんとなく、この子と付き合ったら楽しいのかも、なんてことを思う。

（お礼に何か…：）

しかし美咲と会うのは朝のこの時間だけだ。帰りが何時なのかも知らない。営業終了時間は遅くて、確か二十二時までやっているとか看板に書かれていたような気がするが、さすがにこの時間からラストまで働いているわけではないだろう。

「あの、もしよかつたら今夜食事にも——」
言ってしまったから、クリスマス夜の夜に食事に誘うなんて、と内心で慌てた。美咲には美咲の都合があるだろうし、プレゼントに舞い上がって勘違いをしたと思われるかも——しかし美咲は顔をほころばせた。

「いいんですか？」

「あ、はい——あ、でもその、店の予約が取れるかどうか——」

女性と食事なんて初めてだ。しかもクリスマス。昼休みに姉に助けを求めた方がいいだろうか。

「あ、じゃあ私のよく行くお店でもいいですか？ 穴場で、予約してなくても入れるんです。今日も一人で行こうかなって思ってたところで。おしゃれってより落ち着く居酒屋なのでムードも何もないんですけど」

「あ……実は女性と食事なんて初めてなので、助かります」

正直に言うと、美咲はパチパチと長いまつげを何度もしばたかさせた。

「モテそうなのに」

「いえ、全然。それに実はちょっと体が弱くて。若い頃は入退院を繰り返していて——」

何も今言う話じゃなかったな、と口調を落とし、た時、エレベーターが到着した。ラッキーと思いつながら乗り込む。

「そうでしたか……もう大丈夫なんですか？」

「はい。移植を受けて——あ、時間」

早く決めないと三階に着いてしまう。

「十七時半に近くの公園で、大丈夫ですか？」

「わかりました」

その時間なら、美咲を待たせることはないだろう。また後で、と言いつつ、頬が熱を持つのを感じた。

「おはよう」

「おは——あれ、体調悪い？」

倉田の頬が少し瘦（こ）けているように見えた。

風邪でもひいたのだろうか。

「飲み過ぎたんだよ……」

「そんなに飲んだの？」

隣の席に鞆を置き、弁当箱を冷蔵庫にしまう。

「めっちゃくちや飲んだ。いや無理」

「え？」

「もう酒のこと考えただけで吐く……」倉田が苦しそうに胃の辺りを押さえる。

貴之は体のことがあるので酒は飲まない。適量

なら飲んででもいいと言われてはいるが、吐いたり下痢をしたりすれば免疫抑制剤の吸収に影響が出る。飲んでいる人たちを見れば楽しそうだなとは思うけれど、やっぱり何よりもいただいた命を大事にしたい。

(…：恋愛、してみた方がいいのかな…：)

今の生活に満たされてはいるが、恋愛をすればきつとさらに潤うのだろう。姉の心配も減るのかもしれない。

「ううう…：」倉田が呻いた。

「水、買ってこようか」

「頼む…：」

「待ってて」

一度廊下に出て、エレベーターホールの自動販売機にコインを入れる。

(百三十円…：あれ？)

確か小銭があつたように思うが——思い違いか。千円札を入れると珍しく機械はスムーズに飲み込んだ。なんだかそれだけで得をしたような気分になるから少し可笑しい。入院中はそんなこと、考えもしなかった。今は些細なことでも楽しく思う。

ペットボトルを取り出した時、エレベーターのドアが開いた。降りてくる部長に頭を下げる。

「おはようございます」

「どうしたの？」部長がわずかに眉根を寄せた。

「え？」

「具合悪い？」

「いえ、大丈夫です」

「あまり顔色が良くないな……年末で忙しいからって無理しちゃだめだよ」

自身の子どもも心臓の手術をしている部長は、普段から過剰な程に貴之の体調を気遣ってくれていた。

「しんどかったら早退してもいいから」

「ありがとうございます」

「あ——そうだ、こないだ教えてくれたアプリ、入れてみたよ。ありがとう」

「嫌がりませんでしたか？」

部長の愛娘はペースメーカーを入れている。高校生なので友達と遊びに行くこともあるだろうし、毎日の登下校だって常に誰かと一緒にいるわけでもない。けれどそんな時、突然倒れてしまうことがあるかもしれない。でも、せっかくの青春時代。これまで病気を理由に行動を制限されることが多かったので、極力自由にさせてやりたいんだが——そう、相談されていた。そこで、貴之自身も使っていたGPSの共有アプリを教えてやったのだ。

「上の娘は『マジ無理』って言ってたんだが、手術をした娘は嫌がらなかったよ。それどころかお守りがわりだって……」

多感な年頃の子が親に居場所を確認される——

それをお守りと感じてしまう切なさ。

「……素直なお子さんに育ったんですね」

「ああ。俺に似てよかったと感動していたら妻からおかわり禁止を言い渡されたけど」

それについてはコメントしづらい。「はは……」
と笑ってごまかす。

くく略くく

9・康人

(会いたいけど……無理かな)

明日はバレンタインデー。

一緒に住んでいた頃は板チョコを二人でたくさん買い込んで湯煎で溶かし、指ですくってお互いに舐めさせあつて……エッチなこともたくさんした。

普段は優しいのに、道隆はたまにとでもいじわるになった。康人がすぐにいやらしい気分になってしまふのを知っていて、わざとチョコレートをついた中指で康人の舌をこすり、くすくすと笑った。

「んっ……道隆くん……」

「どうしたの？」

わかっているくせに道隆はいつもいやらしいこ

とを口にさせようとした。

「エッチ……したい」

「エッチってどんなこと？」

「気持ちいいこと……」

「それだけ？」

他に何があるというのだろうか——回らない頭で必死に考えている間に、道隆はまたチョコレートをすくい、康人の口に差し込んだ。

「康人は気持ちいいことも好きだけど、恥ずかしいことも好きだよね」

（恥ずかしいこと……）

指を吸い、チョコレートを味わいながらもごもごと口を動かした。

「好き……」

「今日は素直だね。かわいい」

「道隆くん……」

ペニスは痛いほどに張りつめていた。抱きつくようにしてそれを道隆に押し付けると硬いものにぶつかった。

「道隆くんのおちんちんも起ってる……」

「そりゃ康人にこんなかわいいことされたら誰だって起つよ」

「じゃあ早くしてよ」

少し拗ねたように言えば、道隆は余裕の笑みを浮かべた。

「たくさん我慢した後の方が気持ちいいくせに」

「やだっ……」

焦らされ過ぎるとほんの少しの刺激でもイッてしまうから嫌なのだ。早く触ってほしい。触る前に焦らすのではなく、イカさない程度に触りながら焦らしてほしい——でもそれは、恥ずかしくて言葉にすることはできなかった。たぶん、気付かれていたけれど。

「じゃあ脱いで」

「自分で……？」

「もちろん。自分で裸になって舐めてほしいところにチョコレート塗ってごらん」

「あっ……はぁ……」

康人は耐え切れず、興奮のあまりおぼつかない手でいそいそと服を脱ぎ、明るいライトの下で裸体をさらした。そして道隆の鋭いほどの視線を浴びながらチョコレートを指ですくい取ると、乳首とペニスの先端に塗り込めた。熱いと思ったのは一瞬で、それはすぐに体温になじんだ。

「ちゃんとお願ひもしてね」

「道隆くん……僕の体のチョコレート舐めて……」

早くしないとチョコレートが垂れてしまう。床が汚れないよう、右手をペニスの下に添えて待った。ドキドキして、心臓が壊れそうで、でもそれが楽しかった。

「えっろ……康人は乳首とちんちんの先が好きなんだね」

「好きっ！ 舐めてっ！ 早くっ……っ！」

切羽詰まった様子の康人に、道隆はにっこりと笑うと最初に康人の右乳首を舐め、吸い、それから舌先で乳頭を弄んだ。

「ああっ！」

「ん、おいしい」

「あっ……」

そのまま舐めていてほしかったのに、道隆は次に左の乳首を口に含んだ。

「んあっ！」

時折チュパチュパという音が鳴った。バレンタインのチョコレートを、道隆が乳首から食べている——。

「ああっ……」

ペニスが切なさを訴えていた。

「——ごちそうさま」

「あっ、やだっ！ もっとっ……っ！」

もっとも思いつきりいじってほしい。けれど道隆は床に膝をつくとき、茶色いペニスの先端をすぐ近くからじっと見つめた。

「今イッたらホワイトチョコレートになるね」

「やっ……」なんて恥ずかしいことを。

「そう？ 康人のちんちんの、チョコレートの精液掛けなんてエッチだけど」

「やっ……」

「ねえ。ちんちんって舐めてほしいのは先っぽだ

けなの？」

「あ……」

羞恥心をあおるいじわるな言葉に胸が高鳴った。
「康人はエッチだからちんちん全部舐めてほしい
のかなと思ってたけど」

「あ……あ……」

「そっか、康人は亀頭責めが好きなんだね。たっ
ぷり舐めてあげる」

「あ、あ——アアア！」

それから康人は三十分以上亀頭だけを舐められ
続け、何度も精液を吐き出し潮まで吹いた。道隆
は満足気にそれらを飲み干すと、チョコレートの
おかわりをねだって——。

（会いたい………したい……）

もう一度道隆に抱かれない。恥ずかしいこと
も、何でも言うから——。

「あ……」

道隆を失った悲しみが大きすぎて、事故以来、
一度も勃起しなかったペニス。それがわずかに膨
らみ始めていた。

「道隆くん………僕またおちんちん勃起しそうだ
よ………」

独り言は部屋の空気にとけるようにして消えて
いく。それと同時にペニスも静かに体を下ろした。

（道隆くん……）

その時、枕元の携帯が震えた。

『康人、起きてる？ お疲れ様』

『お疲れ様、道隆くん。明日、バレンタインだね』
道隆くんは——打ちかけた手を止め、道隆くんを貴之さんに変える。

『貴之さんはチョコレートもらってるの？』

『去年と一昨年、お姉さんからはもらってたよ』

お姉さん。つまり、恋人候補はいないということだろうか。もし貴之に恋人ができたら……そして結婚したら、こうして連絡を取ることもできなくなるだろうと思うと怖かった。だから申し訳ないけれど、ホツとしながら親指を動かす。

『写真送るね』

返事はすぐに来た。

『何の？』

『チョコレート』

たぶん会えないだろうから……それでも準備して、写真だけでも送りたいかった。

『したくなっちゃうよ』

『何を？』

『エッチ。最後のバレンタインのこと覚えてる？』

『覚えてるけど、送るのは普通のチョコレートの写真だよ！ 僕が食べるけど』

『エッチなやつがいいな』

『やだよ』

そう返しながら、頭では道隆が望むならでもいいかなと思っていた。だって好きな人には自分

で興奮してほしい。

『どうして？ ノリノリだったじゃん。乳首とちんちんの先っぽにチョコレートべったり付けてさ』
『恥ずかしいこと言わないでよ』全身が熱い。

『二回も射精して潮まで吹いて、すごくかわいかったしおいしかったよ』

『今日の道隆くん、なんかエッチ』

何か興奮するようなことでもあったのだろうか。

『思い出すだけですごく興奮する』

『恥ずかしいからやめてってば』

でもずっと覚えていてほしい——すぐにもう一通送る。

『本当にエッチな写真欲しい？』

すごく恥ずかしいセリフ。でもまた道隆に体ごと愛されたい。けれどなかなか返信は来なかった。気まずい思いをさせてしまったのだろうか。それとも眠ってしまったのか。急いで親指を動かす。

『ごめんなさい。忘れて』

次の返信にもまた少し間があった。

『俺もしたいけど』

——けど。

『ほんとごめんなさい。おやすみなさい』

逃げるようにメールを送ってベッドの中に潜り込んだ。メールができるだけで幸せだと思わなきやいけなかったのに、欲を出した。

携帯が震えた。もしかしたらもう連絡はしない

と言われるのかもしれない。そう考えただけで怖くて涙がこぼれた。でもそう言われても仕方のないことを言ってしまった。だって、道隆も本当は自由になりたいだろうに。

けれどメールを開くと、そこにあっただのは優しい言葉だった。

『また明日メールするね。おやすみ』

明日もメールをもらえる。そのことにホッとして目を閉じると、重いまぶたは今日はまだもう仕事は終わりだと言わんばかりに動かなくなった。

10. 貴之

「おはようございます」

背後から聞こえた声に振り返る。美咲だった。

「おはようございます。今日も寒いですね」

いつもと同じように返したつもりだったが、なぜか美咲の表情が強張っている。視線も交わらない。

「どうかしましたか？」

寒い日が続いているので体調を崩しているのだろうか。

美咲とは、クリスマスに一度食事をしたきりだった。連絡先も交換していなかった——女性に連絡先を聞いたことなんてなくて、タイミングもわからなかった——し、そのまま年末に突入して

忙しくなってしまったからでもあった。

でもまた一緒に行きましようねと言ってはいたので、きつとまたいつかタイミングが合えば食事に行くだろう……と思いつながら、一か月以上が経ってしまった。

背後でチンと音が鳴った。先に乗り、開ボタンを押して美咲が乗り込むのを待つ。もしかしたら先に行ってくださいと言われるかもしれないと思つたが、美咲は俯いたままべこりと頭を下げて乗り込んできた。

何か声を掛けるべきか、それともそつとしておくべきか。少なくとも昨日は普通だったし、その時に失言をした覚えもない。まあたまにはこういう日もあるかと思いつながらエレベーターの動きを感じていると、背後で美咲が動く気配があつた。

「あの、これ」

振り返るとピンク色の袋が差し出されていた。

「はい？」

「あの……バレンタイン。よかったら」

「あ……ああ、いいんですか？ わざわざすみません。ありがとうございます」

もらえるなんて想像もしていなかった。素直に嬉しいと思う。重みを手が感じ取った時、エレベーターが三階に着いた。美咲はそそくさと逃げるように降りていく。

（もしかして渡すのに緊張してた……？）

袋を開き、中を覗き込む。メッセージカードが入っていた。中が気になったがすぐに五階に着く。あまり人に知られない方がいいような気がして隠すように鞆に袋を入れ、今一度気を引き締めて会社に入った。

開封は部屋ですることにした。ダイニングやリビングでそんなことをすれば、姉に見つかってかわられるだけだ。クリスマス的一件で、すでに一度痛い目を見ている。

丁寧にラッピングされた箱の中には、一粒サイズのチョコレートが五つ入っていた。ナッツがのったものと、ホワイトチョコレート。ココアがかかったものは生チョコだろうか。どれもおいしそうだ。けれどいただく前に、封筒に入ったカードを開く。

『クリスマスは、とても楽しかったです。ありがとうございます。もしよかったら、また一緒にご飯に行きたいです』

仕事中、もしかしたらラブレターかもしれないとドキドキしていたのだが、美咲からのメッセージカードは拍子抜けするほど淡々としていた。それを残念とも、安堵とも取れない気分で見つめる。

カードを戻そうとすると、裏面に小さな文字が見えた。メールアドレスだ。どうして裏面に——メッセージ欄には書ききれなかったのだろう。

アルファベットを一つ一つ確認しながら携帯に打ち込んでいく。しかし、普段携帯で文字を打つことがないので難しい。いっそのことパソコンから送ってしまおうか——しかしそれでは、受信に気付くのが帰宅後になってしまう。電話番号だったらよかったのに——しかし書かれていないのだから仕方ない。

アドレスの入力を終え、本文に文章を打ち込み始めた時だった。

「……ん？」

表示された予測変換に違和感を覚える。

「こんばんは」と打とうとした時、なぜか予測変換に「興奮する」と出た。首を捻りながらも続けて「安岡です」と打とうとすると、今度はなぜか「康人」の文字。

そのような名前に覚えはない。それとも最近そういう芸能人が人気なのだろうか。入力を見つめてみる。

（今日は、す……ん？）

素敵な、と打とうとすると「好きだよ」と表示された。明らかにおかしい。

（なんだ？）

不思議に思いながら続けて「チョコレート」と打とうとして「ち」を入力すると一つ目に「ちんちん」、二つ目に「チョコレート」が表示された。

約8万字。

貞操帯使います！

セックスもちやんとします！

タオルに排尿もします！

笑えるハピエンです！

よろしくお願いいたします！

二度目の人生をあなたとーサンプルー

©goneone (ジャーわんわん)

2022/ 8/ 26 発行予定

メール:goneonegoneone@gmail.com

pixiv : 19591291

Twitter:@goneone11

本書の無断複写・転載・複製を禁じます。

※この作品はフィクションです。

実在する人物、団体等とは一切関係ありません。